

# ショーとペガサス



文&絵: Joy Yin

JAPN1231 Tadoku Spring 2023

Level 1



このストーリーのヒーローはpegasus。

ペガサスは、シアターのショーがとてもとても好き。  
いつも、「さい高こうのショーをしたいよ」と言うい。

「でも、一人ひとりでは、ショーができないよ。」  
それから、ペガサスは、他のほかどう物ぶつをさがす。



ペガサスは、うさぎ兎ちゃんと会あった。

「うさぎ兎ちゃん。お前まえは、オレとさい高こうのシヨしよーをしたしたい？」

「うん、うん！ あたしは、子供こどもの時とき、おじいさんと

たくさんのシヨしよーをしたした。とても楽たのしかったよ！」

うさぎ兎ちゃんはペガサスのシヨしよーも楽たのしいと思おもう。





pegasusは思った、

「楽しい？そのバカなこと。」

でも、言わなかった。

それから、兎ちゃんとpegasus

は、猫とリスと会った。猫とリス

は子供の時の友だち。

とてもとてもいい友だち。

「ほらほら！君たちは、

あたしたちと、ショーをしたい？」

「ショー？おやおや、面白いね。」

リスはとてもはずかしい。

知らないどう物の前に話すのがきらい。

猫と話すのが安いけど、他のどう物はむずかしい。

でも、リスはショーをするのがとても好き。

だから、リスも、「いいよ。」と言った。

ペガサスはとてもうれしかった。

「やっと、他のどう物たちがいるよ！」



まいにちまいにち あさ 朝から夜まで、れんしゅうする。

「さい高こうのショーのために！」

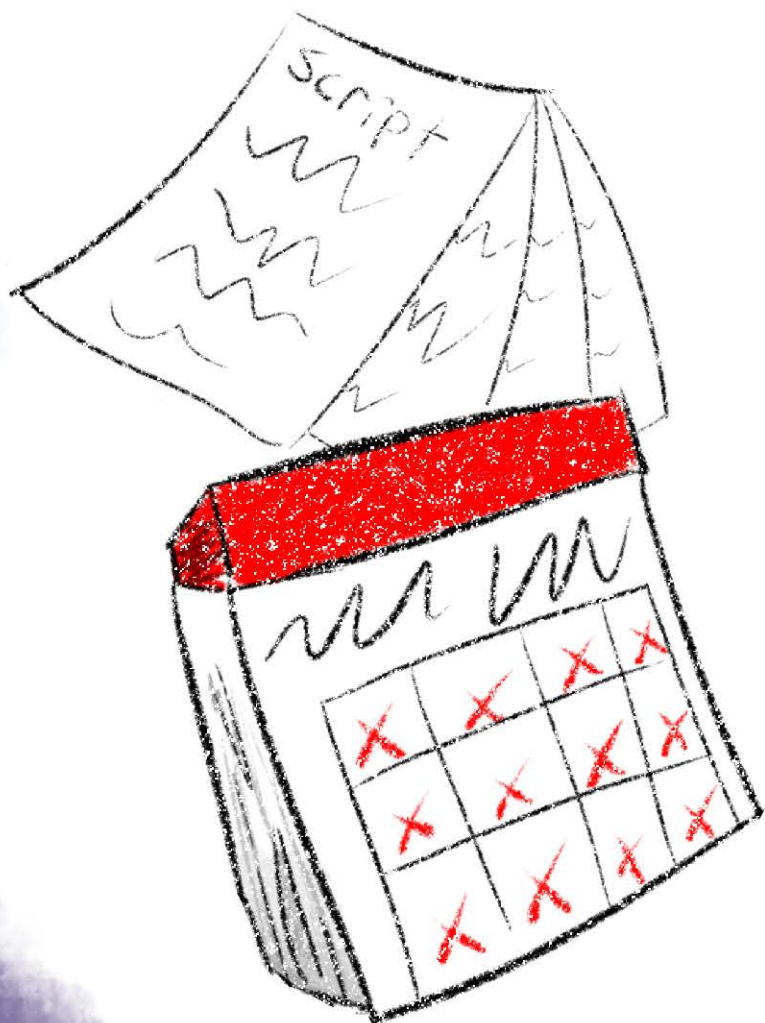
「うーうん！それから、楽たのしい！」

「ふふ。そうだよね。」

「はっ、はい！」

そして、ショーをする日ひが来た。

兎ちゃんうさぎは、「みんな、がんばりましょう！」



リスはステージに出た。

「あー」

ここに、そこに、あそこに、目が見る。  
パニックした。

「たくさんの目が私を見る。」

こわいな。こわい。私、見ないてください。」



「大変だ。次は、何？ 私は、何を言うのか？」

「こわい。本当にこわい。」

「ペガサス、猫、兎ちゃん。ごめんなさい。」

みんな、本当に、ごめんなさい！」





「大丈夫！次のショーでは、もつとがんばる。。。でも、ペガサスは、とてもおこった。」

「お前は、はずかしい？他のどう物の目が見ているのこわい？バカなバカし。ねえ、リス、この何もできないお前は、どうしてここにいる?!」

リスはこれを聞いた。泣いた。  
ペガサスと猫と兎ちゃんから、走った。

「待って！リス！帰って！」



それから猫ねこもとてもおこった。

「ペガサス。どうしてその悪いことばを言った？ 自分じぶんはいつも正しいただと思う？ 何も悪いことをしないとおも思う？」

でも、それはない。君きみはショーの一番大せつないちばんたいことを忘れた。わす」

「え？ちがうよ、ショー、大せつなたいこと、忘れないよ。。。。」

「いいえ。ちがう。ペガサスは、『一人ひとりでショーができない』のを忘れた。わ」

ペガサスは何も言わなかった。

「ペガサス。これから、君きみと会あいたくない。」

そう言う、猫ねこは出た。





「待<sup>ま</sup>って！猫<sup>ね</sup>！待<sup>ま</sup>って！ああ、楽<sup>たの</sup>しかったけど、  
今<sup>いま</sup>は楽<sup>たの</sup>しくないよ。」

友<sup>とも</sup>だちと楽<sup>たの</sup>しいショーをしたけど。。。」「

「友<sup>とも</sup>だち？いつから？友<sup>とも</sup>だちじゃないよ。」

「ペガサスはまたちがうよ。あたしと、リスと、  
猫<sup>ねこ</sup>と、友<sup>とも</sup>だちだった。ペガサスもあたしたちの友<sup>とも</sup>  
だちだと思<sup>おも</sup>った。」

かなしい兎<sup>うさぎ</sup>ちゃんも出<sup>で</sup>た。

ペガサスは、一人だった。

「あのダメなリス。あのバカな猫。あのバカな兎。でも、どうして、その言ったこと、忘れない？」

「そうだよ。なんでもないよ。一人でもいい。

他のどう物はないでもいい。

友だちはない、それも。。。」

ペガサスは兎ちゃんのことばだと思い出した。

「本当に、友だちだと思った、のか？」



「オレは、オレは一人でもいいけど。」

そう思った、けど。

あの時、本当に楽しかったよ。」

「みんな、ごめんなさい。おれ、本当に、悪かったよ。」



急に、兎ちゃんは、帰った。そして、リスと猫もいる。

「よかった、ペガサス！」

「ええ？どこから来た？」

猫は笑った。「本当は、出たことはないよ。」

「えええええ？！だから、私の言ったこと聞いた？！」

「うん！」

「そう。」

「はい。」

「ぐーー。」ペガサスははずかしい。





「大丈夫、<sup>だいじょうぶ</sup>ペガサス。ペガサスは、<sup>わたし</sup>私たちの友だちだから。  
<sup>わる</sup>悪いことをしても、<sup>とも</sup>友だちだよ。ペガサスは、<sup>わたし</sup>私たちは、  
ショーをするのが好きだよ。<sup>す</sup>いいショーをしたいよ。」

「だから、いっしょに、次のショーつぎに行いこう！」

